

アサクサエンターテインツ

主催 アサクサ実行委員会
日時 平成30年2月18日(日)～3月4日(日)
会場 アサクサ(台東区西浅草1-6-16)

この企画は、浅草を訪れる国内外からの観光客および近隣住人の皆さまをお招きし、大衆文化を地政学の視点から批評的に考察する映像祭です。SF、新興宗教からジャーナリズムまで、思想として、レジャーとして、産業として、噴き出す怒りと笑い…。観光地浅草に寄り集まる多国籍な人々を背景に、近代政治における統治術の功罪を問いかけます。

映像祭の会場となる「アサクサ」は、30平方メートルの一般住宅を改築したキューション・スペースです。アーティストの新作制作から普及イベントの実施まで、批評的思考を促す現代アート事業を企画・実施しています。
(↓・→)撮影:大坂崇



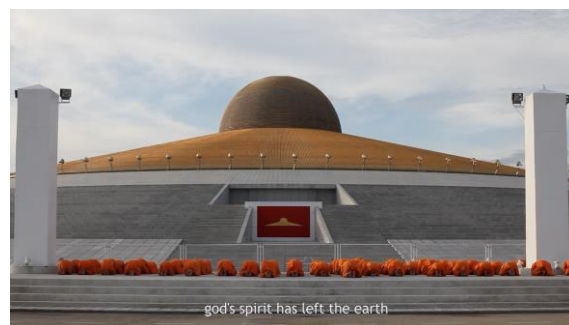
これまでに展覧会や上映会に関わってきたアーティストを含む、全9組の作品を会期中A・B・Cのプログラムに分け、上映されました。

●Aプログラム

イム・フンスン「北漢山」(2015年)
北朝鮮出身の女性が、中国・韓国にわたり、歌手となった半生をモノログと歌曲「イムジン河」の独唱からなる映像作品。
(↓)



コラクリット・アルナーノンチャイ
「おかしな名前の人たちが集まった部屋の中で歴史を描く 4」(2017年)
元タイ王国大使であった祖父母への眼差しを通して、70年代の学生運動に派生したカウンターカルチャーや新興宗教に現代における神話を読み取った作品。
(↓)



トリン・T・ミンハ

「ベトナムを忘れること」(2015年)

ベトナム戦争終結40周年(2015年)に制作。ベトナムの神話や戦争時を経た人々の今と昔を問い直している。

(→)



アントン・ヴィドクル

「全人類に不死と復活を！」(2017年)

真の宗教は先祖信仰であると唱える思想家ニコライ・フョードロフの著作をひもとき、「復活」の場として博物館を扱った作品。

(→)



●Bプログラム

ミン・ウォン「世界の窓くパート4」(2018年)
タルコフスキー作品《ソラリス》に言及しつつ、広東オペラとSFのつながりを示唆。

(↓)



ヒト・シュタイエル「ノーベンバー」(2004年)
自身の10代からの親友で、後にクルド独立のために戦い英雄として命を落としたアンドレア・ヴォルフの肖像を起点に、ポスト革命期におけるイメージの役割と考察。(→)



佐藤満夫、山岡強一「山谷-やられたらやりかえせ」(1985年)

山谷における労働者と暴力団の確執を描き、高度経済成長期の裏側に築かれた支配構造を暴きだす作品。

(→)



●Cプログラム

※A・Bプログラムの他、以下の2作品が会場1階のモニターにて会期中常時上映されました。

(↓)撮影:大坂崇

ヨシュア・オコン「ミアスマ(汚染)」(2017年)

メキシコ人ジャーナリスト マヌエル・ブエンディアの出版物を起点に目に見えるものとその裏側を、ジョージ・ブッシュの銅像に変えて表した作品。

ミンク・イム「国境を越え呼びかける周波数」

(2011年)

失われつつある場所や抛り所から追放された人々に伝達する、一種の波長として歌が生まれ、拡がり始めるプロジェクトを記録した作品。



会期中は、「アサクサ」での上映の他に、以下の2箇所で映像祭をPRするモニター上映を実施。

浅草郵便局ショウウィンドウの様子
(↓)撮影：大坂崇



都営浅草線改札前(株)プライスの様子
(↓)撮影：大坂崇



「アサクサエンターテインメント」は、盛況のうちに終了しました。

なお、本企画は芸術文化支援制度の他に、アーツカウンシル東京及び公益財団法人朝日新聞文化財団からの助成採択が決定し、2度目の映像祭の開催を2018年9月に予定しています。また、2018年4月には、現代アート界でもっとも注目されているアーティストのひとりであるヒト・シュタイエルを招聘し、浅草演芸ホール(東洋館)にてアーティストトークを行うなど、今回の実施で出来た縁を活かしたイベントを継続的に展開していく予定です。